

◆ その後の動向

昨年7月の切り上げ後、その動向が注目された人民元の対ドルレートですが、政府の陰ながらのコントロールもあり、その上昇ペースはほぼ年率1%程度の小幅にとどまっていました。しかしそのおかげで中国の外貨準備高は増加の一途をたどり、既に8千億ドルを突破、このままいけば1兆ドルにも達しようという勢いで、政府はドルを使った海外投資を大幅に緩和するなど、外貨減らしに奔走しました。しかし、2005年のアメリカの対中貿易赤字は2千億ドルを突破、アメリカ側からの切り上げ圧力がまた高まっています。今年、春節明けから元高のペースが速まったのも、今回の胡錦濤訪米で中国側がアメリカからの巨額の買い付けを提示したのも、圧力緩和努力の一端に他なりません。

中国にとって、元高は輸出競争力の低下につながりますが、その一方で、大量の石油消費の40%以上を海外に頼るようになった中国にとって、最近の原油高のダメージを考えれば、元高は有利な点も有ります。いずれにせよ、対米輸出主導の経済成長モデルには一定の限界が有り、国内消費を喚起して、国内需要主導による経済成長モデルへの転換が求められているわけで、人民元の動向はその進捗状況と密接に関わりあうといえましょう。